大きなけやきの木の下で　絵本のはなしをしましょうよ。



2026 年　10 月の中ごろ　こまばようちえん

　みなさま、こんにちは！ 秋、真っ只中。気持ちの良い季節ですね。福島にいる叔父が市民農園で収穫したばかりの「生落花生」を送ってくれました。「生落花生」は収穫後、乾燥させずに塩茹でして食べます。「おおまさり」という大粒の落花生です。９月から 11 月ごろが旬。秋は収穫の季節。美味しい旬の食材を味わいつつ、絵本も楽しんでくださいね。

　では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。

①　たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



●『はっぱっぱっ！』
すとうあさえ・文　松永悠一郎・絵　ほるぷ出版　2026 年/1298 円

「はじめてのこよみえほんシリーズ」の新刊です。「はっぱっぱっ！」のかけ声でページをめくっていくだけのシンプルな展開です。幼稚園のけやきやイチョウの葉が紅葉するにはまだ時間がかかりそうですが、家の近くの遊歩道のさくらの葉は紅葉しはじめています。私はこの季節が大好き。きれいな色の葉が落ちていると、すぐ拾って家に持ち帰り、窓辺に並べてみたり、押し葉にしたりしま

す。絵本に登場する「はっぱおばけ」は、我が家のハロウィンの常連です。紅葉の季節を小さな人と楽しんでください。（須藤）



●『パン　どうぞ』
彦坂有紀　・もりといずみ作　（講談社）　2014 年/1320 円

表紙のクリームパンのおいしそうなこと。あんパン、クリームパン、カレーパン……。おなじみのパンが次々に出てきます。「あんパン　どうぞ」。ページをめくると「ぱくっ」。かじりあとから、あんこが見えてるよ。「ジャムパン　どうぞ」「ぱくっ」。いちごジャムが見えてるよ。あー、おいしそう。実はこのパンたち、絵ではなく木版画で描かれています。香りまでしてきそうです。パン屋さんに飛んで行きたくなる絵本です。（須藤）



●『あきのおさんぽ　いいものいくつ？』
おおたぐろ まき　（福音館書店）2018 年/1100 円（重版未定）

ある秋の日。男の子とお父さんが田んぼの小道を歩き始めます。最初に見つけたのは「ピー　ヒョロロー」青い空に 1 羽の大きな鳥（この鳴き声は…そう、トンビ）。お次は川の上を追いかけっこする 2 羽のカワセミ。下に目を落とせば、あっ、3 匹のザリガニ。首を垂れる稲穂の中にはバッタが 4 匹。森への小道にはちょうちょが 5 羽。赤い実（カラスウリ）も 6 個生っている。…という具合に、男の子は “秋” ならではの素敵な発見をしていきます。9 個生っているアケビに

10 羽の小鳥がとまるページでおしまいかと思いきや、ラストには数えきれないほどのアキアカネが！圧巻です。
個人的に一番好きなのは、ドングリときのこのページ♪今年はどこでドングリ拾いをしようかしら。大好きなきのこ狩りにも行きたいな。秋になると開きたくなる絵本。美しさと遊びゴコロがギュッとつまっているから、大人も心ゆくまで楽しめます。（近藤）



●『あかが　いちばん』
キャシー・スティンスン 文　ロビン・ベアード・ルイス 絵　ふしみ みさお 訳
（ほるぷ出版）2005 年/1320 円

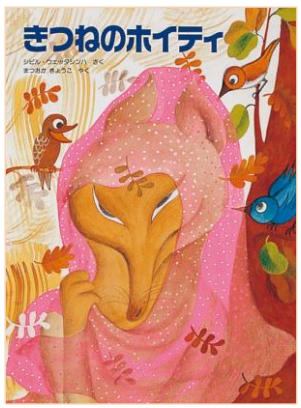
大人になってしまったわたしたちは残念ながら、子どもの気持ちを 100%はわからない。こんなに楽しい絵本を読んだ後、ちょっぴりさびしくなりました。そして、わたしの敬愛する絵本作家マーシャ・ブラウンの言葉を思い出します。「芸術家の中には、魔法の庭園に入る鍵をもっている人もいます。鍵をもたない人は、壁の上からその庭を覗くしかありません。この庭園というのは、子どもの内なる想像の世界で、この庭園を歩く人は、幼い子どもの目や感覚を通して世界を見るのです」
　というわけで、おかあさんに何を言われても“赤が大大大好き！！！”をつらぬく主人公の女の子に拍手！「おかあさんったら　あかのこと、なんにも　わかってないんだよ」言葉にできない子どもの気持ちを言葉にし、生き生きとした絵で表現する作者もまた、魔法の庭園に入る鍵を持っているのだと思います。
（近藤）

① 年中・年長組のみなさんに。



●『ねこのけいさん』
浅沼とおる　作･絵　（フレーベル館）2011 年（重版未定）

二匹の猫はお腹がすいていたのです。そこへネズミの父さんが釣り道具を持って通過します。「ネズミは１匹、ネコは２匹。でもよく見てごらん、どうやらネズミは魚釣りに行くところ。ネズミが魚を釣ったらネズミが１匹、魚が１匹、わけられる。でも、もしネズミが魚を２匹釣ったら？」。猫たちは、魚の数を想像して、どうやって分けようかと計算します。想像の中では、ネズミの父さんはそれはそれはたくさん魚を釣ってくるはずでしたが……。そうはうまくはいきません。猫には気の毒だけど、結末に大笑いしてしまいました。（須藤）



●『きつねのホイティ』
シビル・ウェッタシンハ　作・絵　まつおかきょうこ・訳
（福音館書店）1994 年/1,540 円

スリランカの村が舞台のお話です。きつねのホイティは人間のふりをして３人のおかみさんに順番にご馳走になります。ホイティはおかみさんたちが自分にだまされていると思って、おかみさんたちの悪口を言います。けれど、実は逆で、正体は最初からバレていたのです。つまりおかみさんたちは、きつねだということを知っていて、親切にご馳走をしてあげていたわけです。ホイティの悪口を聞いたおかみさんたち、どうしたと思います？愉快なお仕置きに、大笑い。おおらかさって、いいですね。（須藤）



●『マリーのお人形』
ルイーズ・ファティオ 文　ロジャー・デュボアザン 絵　江國香織 訳 絵
(ＢＬ出版)2007 年/1650 円

「パリの街に、朝から晩までためいきばかりついている、ひとりのお人形が住んでいました」そのアンティークドールはこっとう品店で高額な値段がつけられ、売り場に飾られていました…とても孤独に。お人形の願いはただひとつ。小さな女の子と一緒に遊んだり、お茶を飲んだり、本を読んだりして楽しく過ごすことでした。一方、このお人形が大好きで連れ帰りたいのに、高価なために買えずにいる女の子がいました。マリーです。
お人形とマリーは、まるで運命に導かれるように出遭います。それからの二人がどんなに幸せだったか…。お子さんと読みあいながら、幸せな気持ちを共有できますよ。そしてなんとなんと、絵本がそのままミニブックになったものが付録としてついています！
最後に。お人形遊びは、ある程度大きな子ども(6・7 歳くらいから)のれっきとした遊びです。質のよいおもちゃの歴史があり、おもちゃ先進国でもあるヨーロッパなどでは、それが一般的な概念だと知った時はなるほどー！とうなりました。子どものおもちゃや遊びについて、大人はどうとらえるのか。実は深い問題だと思っています。(近藤)



●『オリバーくん』
ロバート・クラウス 文　J・アルエゴと A・デュウェイ 絵　はせがわ しろう訳(ほるぷ出版)　1975 年/1980 円(重版未定)

以前、この本をオススメしたK君の保護者の方から、お子さんの感想を聞かせてもらったことがありました。それがあまりに素敵で的を射ていたので、今でも忘れられません。
オリバーくんはフクロウの子。おしばい好きでまねっこも上手です。オリバーくんはママとパパを喜ばせることのできる、優しく器用な子どもでもありました。そんな我が子の将来を期待するママとパパは「この子の才能をのばしてやりましょうよ」と、俳優か医者か弁護士になってほしいと強く望みます。さてさて、オリバーくんは大きくなったとき、何になったと思いますか？
冒頭のK君の感想をご紹介しましょう。待ちに待ったラストページを読み終えて満足そうにひとこと、大きな声で言ったそうです。「それがいいんだよ！」って。いいぞK君！子ども向けでありながら、親に刺さる絵本かもしれませんね。
(近藤)

③　大人のみなさんに。



『うつくしい！』
谷川俊太郎・文　川島小鳥・写真　（偕成社）1980 円/2026年

「うつくしいもの、それはなにもとくべつなものじゃない。わたしたちは　きづかずに、いろんなうつくしいものにとりかこまれて　くらしてる。」―谷川俊太郎さんの詩はやさしい言葉でわかりやすく本質をついてきます。味わっていただきたいです。川島小鳥さんの写真も、一枚一枚から物語が浮かんでくるような、想像力が揺さぶられるような魅力があります。みなさんが、「うつくしい！」と詠嘆するもの、それはなんでしょう。（須藤）



●『ベンのトランペット』
　R・イザドラ 作　谷川俊太郎 訳（あかね書房）1981 年/1540 円

　真夜中。少年ベンは非常階段にひっそりと座り込み、となりのジャズクラブから聞こえてくる音楽に耳を澄ませます。自分にしか見えないトランペットを吹きながら…。ベンは毎日の学校帰りにそのジャズクラブに寄って、ミュージシャンたちが練習する様子を見守るのが大好きなのでした。とりわけ「いかしてる」と心をよせるのは、一人のトランペッター。少年の強いあこがれはやがて、トランペッターとの心の通じ合いへとつながっていきます。クラブの楽屋で、トランペットを初めて吹かせてもらうベン。震えるほどに素晴らしい何かが始まる予感のラストページには、ただただしびれます。
　いつだって子どもをほんとうに励まし“生かす”のは、子どもへの深く親切なまなざしを持つ、身近な大人の存在なのかもしれません。白黒だけの配色で感覚的かつアーティスティックな絵がまた抜群にオシャレ。’79 年の隠れた名作です。（近藤）



●『子どもへのまなざし』
佐々木正美 著　（山脇百合子 画）（福音館書店）1998 年/2090 円

　告白します。実は先日、大泣きしました。大切に保管していた絵や文章を久しぶりに見た時のことです。描いた（書いた）のは、かつての幼かった我が子たち。あの頃の我が子の愛おしさと、過ごした日々のなんと尊かったことか…泣いているわたしを、あの幼かった二人が不思議そうに覗き込んでいたかも。

この本の著者(故人)は児童精神科医として長い間、子どもと親の心を見つめ続けてこられました。と同時に、園や学校・児相所・母子ホームなどで、育児と保育の勉強会や話し合いをし、たくさんのセミナーで講演をなさいました。その時の書き起こしをまとめたものが、この本です。

どの章も大切な大切なトピック。例えば「しつけはくり返し教えること、そして待つこと」「思いやりは身近な人とともに育つ」「子ども同士の遊びのなかでうまれるもの」…臨床の場で、不幸と困難を抱えるたくさんの親子と出会ってきた著者ならではの、厳しくもあたたかく具体的な言葉が心に響きます。

著者のメッセージも載せておきますね。

「子どもとの“今”の時間を大切に。子どもの笑顔や喜ぶ姿にご自身が喜べるご両親であってほしい。子どもの希望にこたえられることに、幸福を感じられる親であってほしい」

佐々木正美先生、子育ての旬の時期に、先生の本にどれほど支えられたことでしょう。ありがとうございました。(近藤)

・絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいなと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに、②年中・年長組のみなさんに、③大人のみなさんに

・「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刊される可能性もあります。

・紹介した絵本は藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で購入して本の部屋に置いてあります。背表紙の藤色の丸シールが目印です。